

Title	歓迎 中華人民共和国展覧会
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1974, 6, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86253
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

歓迎 中華人民共和国展覧会

財団法人 大阪防疫協会

理事長 辻野直三郎

中華人民共和国出土文物展の「京都展」が、昭和四十八年八月十一日より九月三十日まで京都国立博物館・日本中国文化交流協会・朝日新聞社主催、外務省・文部省・文化庁後援のもとに開催された。

これは一昨春秋、日本と中国との間に締結された日中国交正常化を記念する事業の一つとして開催されたものであるが、長いあいだ両国間に続いた不幸な状態に終止符を打つという国民多数の念願が結実したもので、誠に喜ばしいことである。

日本と中華人民共和国とは地理的關係においてもアジア圏内にあり、「一衣帯水」の名において表現される如く極めて近接の地域にあって、古代より文化交流点においても、また経済交流点においても、その歴史は長く輝かしいものがあつた。

私は幸いにも昨年八月十四日京都展を參觀する機会に恵まれた。

中華人民共和国出土文物展図録にある王治秋先生（中華人民共和国国家文物事業管理局局長）の「出土文物展の全体像」によれば「新中国成立以来、考古學關係の発掘調査は非常に大きな成果を収めたが、プロレタリア文化大革命の期間にはいつそう多くの、貴重な発見があつた。わたくしたちは、この数多くの発掘調査のなかから十五グループの発掘成果のうち的重要文物計二—三点をを選び、それに模倣写、補助展示品二三点を加えて今回の展覧会を構成した。科学的に発掘された重要な古代文物を中国以外の場所、しかも数カ所にわたるものを展示するということは今回が初めてである。」とあり、また「友誼の促進を」の項には「今回展示した文物は漢・唐を重点とし、漢以前は南方の楚の文化について考古學上新しく発見されたものを重点的にきわだたせた。」とある。門外不出とも称すべき極め

て貴重にして且つ日本の古代文化に影響を与えた絢爛たる逸品を眼のあたりにして、驚嘆いたるところ時の経つのも知らないありさまであつた。

かかる古代の貴重な文物が発見された所以のものは二大河川である黄河と長江（揚子江）の流域において、広大なる土地を利用した優秀にして強靱な民族の努力による文化遺産であることに思いをはせた。特に私達に興味深いものとしては徐州漢墓の銀鍍玉衣、長沙の馬王堆墓葬出土品、正倉院所蔵の唐代文物に關連する「和銅開珎」銀錢（日本の和同元年（西暦七〇六年）に鑄造）、あるいは紀元前五世紀中葉の湖北省江陵にある望山一号楚墓出土品「越王勾踐の銅劍」は、刀剣技術の粋を集めた珍重すべき貴重品である。河南省後漢時代の靈宝後漢墓出土品「緑釉陶六博俑」は日本の「すごろく」にも似たもので、端正に向

私達の心を、しばし、ほくしてくれたものだった。陝西省長安地区遺址（唐時代）の章懷太子墓前の壁画は先年大和飛鳥村で発見された一二〇〇年前のものとして稱される古墳壁画に影響、關連するものがありや否やと考古學者などによって研究検討が急がれている由であるが、誠に待ち遠しくもあり、また古代文化交流が明かにされることでもあろう。水利展望用として緑釉陶像、交通交易に利用された？緑釉陶駝ひき備、眼をおおうばかりの三彩馬の威容、紙のない時代に於ける記録や書物を書くのに用いた楚の竹簡、未だにわが国において、その利用途が判然とされない？銅鐸に似た銅甬鐘などの出土品を參觀して、その古代文化の高度発展の経過と日本文化との關連性に深々たるアジア民族としての親近感を脈々として感得することができた。

その他多くの出土品を僅か数時間の短かい參觀時間ではあつたが、私にとって忘れ難い終生の思い出として胸に焼きつく善隣友国の文化と姿であらう。

なお中国の陶磁器その他については、稿を改めて記述することとして割愛する。

十一日までの一ヶ月間、日本万国博覧会会場跡地の「お祭広場」を中心として約二〇万㎡にわたつて「中華人民共和国展覧会」が開催されることとなつた。これは大阪商工会議所会頭佐伯勇氏が発起し、且つこれを力強く推進された結果、結果としてその実現を見るに至つたのであり、一月二十三日に中華人民共和国駐日千恩和二等書記官・佐伯会頭・黒田大阪府知事・大島大阪市長等關係者出、列席によつて仮設展示館の納入式が厳かに執り行なわれた。もちろんこれは、昨年東京・京都において開催された中華人民共和国出土文物展に次ぐ日中国交正常化の第二の画期的な催物であつて、日中交流の意義極めて深く、特に経済的観点からは、浪速の地大阪としての、その成果を期待して止まない。

日中文化交流は遠く飛鳥時代の西暦五三八年、仏教が傳來して以来、朝鮮を經由して建築、彫刻、繪画、工芸がもたらされ六四五年から七九四年の白鳳、天平時代の仏教美術の中心は建築と彫刻であり、大和地方と畿内を中心に唐風文化が発達して仏教建築の黄金時代を築いた。既にして四天王寺は浪速の地

に聖徳太子によって建立され、七五四年には唐僧にして日本律宗の開祖と称せられる高僧「鑑真和尚」が来朝して唐招提寺を建立する等大和、浪速は急速な中国との交流地帯となつたが、
// ニュー大阪ガイドブック // に
よれば「安政の条約に基づいて、川口町一帯に外国人居留地が設けられ、これが、やがて大阪開港の文明開化に貢献した。川口居留地跡の碑は西警察署と道路を隔てた本田小学校の北側にある。」と記されており、特に華僑を中心として中国との経済交流は盛んであった。

この浪速大阪の地において、「中華人民共和国展覧会」が民間経済人によって発起され、既に一月二十二日「中国展大阪府民協力会」の発会式をみるなど、官民の絶大なる後援のもとに開催されるこの展覧会に、双手を挙げて大歓迎すると共に、この好機会をとらえて日中相互信頼のためにも、極めて盛大にして且つ日中友好、善隣友国の永遠に変わらぬいきすとなることを、心から念願して、拙ない歓迎の辞と致したい。(多謝)